

トピックス
真の公共観を持った都市プランナー
「生誕150周年記念 後藤新平展—近代日本をデザインした先駆者—」
文 西村幸夫

今年の後藤新平の生誕150周年にあたる。医師から内務省の衛生局長へ転身し、その後台湾総督府の民政長官、満鉄総裁と植民地の都市経営にあたり、ひるがえって通信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市長などを歴任した。明治末から大正期にかけて人気と実力を兼ね備えた政界の大立者であった。

台湾および満州の植民都市の基礎を築いた大プランナーであるとともに、国内にあつては西の関一(せきいち)大阪市

長とならんで都市づくりに空前絶後の功績を残した人物でもある。その最大の業績はなんといっても関東大震災後の帝都復興事業の遂行であろう。後藤新平は大正12年9月1日の大震災の翌日、内務大臣となり、わずか数日のうちに「遷都はしない、復旧ではなくさらにひと回り大きくする復興をめざす」といった帝都復興の大枠を定めたことで知られている。彼は内務大臣であると同時に帝都復興院の総裁を兼任した。

世間では「大風呂敷」と揶揄された大東京の都市計画を後藤新平が発表したのは震災の2年前、彼が東京市長の時であったが、総事業費8億円にものぼるこの計画は、けしてはったりや誇大広告でなく、綿密な調査に基づいたものであった。こうした蓄積があったので首都壊滅の大地震という国家の一大事の直後にも冷静にかつ大胆な計画を構想することができたのだ。後藤の調査魔ぶりは満鉄に調査部を設けたり、東京市に市政調査会を創設したりした経歴にもよくあらわれている。

もうひとつ後藤が迅速に帝都復興事業にとりかかることができた背後には、有能な部下を随所に配して政策遂行にあたらせた彼の行政スタイルがあった。能力のある人材を三顧の礼をもって厚遇で迎え、大枠の指示を与えるだけであとは各自に存分に腕をふるわせた後藤新平の使いの大胆さが、部下にやる気を起こさせ、十二分の力を発揮できるような舞台をつくりあげたのだ。部下にとっても仕えがいのあるトップリーダーだったのだろう。



上/後藤新平肖像。『大東京写真案内』(博文館、1933)より。下/東京市(当時)の刊行した復興記念写真帳『復興』(1930)より、昭和通り江戸橋付近。会場では生い立ちから医者志した青年期、そして未来の若者のために尽力した晩年まで、後藤の生涯を伝える資料が展示される。

『帝都復興計画第一案』(1923)伊東市教育委員会所蔵。関東大震災後の復興計画中の構案設計者、太田圓三の遺品から一昨年発見された。

こうした仕事のやり方を貫いた後藤の思想は、学問もなく(医者とはいえ、須賀川医学校という超エリートとは言えない経歴だった)、藩閥もなく(薩長土肥とは無縁の陸中国胆沢郡塩竈村一現・岩手県奥州市)の出身だった、軍閥もない(後藤自身は長州

の軍閥と近い間柄だったが本人は文民だった)ひとりの男が、自分の実力だけをたよりに頭角を現し、大成していったという彼の経歴に如実に表れている。

医者としてひとりの患者の病を治すのではなく、衛生官僚として疫病の予防という衛生政策をおすすめることのほうが人民のためになるという彼の公共観は、晩年の自治三訣(じちさんけつ)にまで一貫している。自治三訣とは後藤が唱えた「人のお世話にならぬよう、人のお世話をするよう、そして報いを求めぬよう」という自戒のことばである。後藤新平という類いまれな人物が、いかに公の精神に生きようとしたかを、この言葉からう

かがい知ることができよう。

このたび江戸東京博物館にて「生誕150周年記念 後藤新平展—近代日本をデザインした先駆者—」が開催される。帝都復興事業の業績を中心に具体的な計画図から、後藤新平の人となりが分かる遺品まで幅広く展示される。近代東京を形づくった男の息吹に触れてみるのはいかがだろうか。

にしむら・ゆきお
1952年福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。96年より同大工学教授。専門は都市計画、都市保全計画、市民主体のまちづくり論など。工学博士。著書に『都市保全計画』(東大出版会)、『西村幸夫 都市論ノート』(鹿島出版会)ほか多数。

